

27	田原	田原市立中山小学校	ミヤガワ ヒロフミ 宮川 寛史
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

いろいろな角度から物事を見つめながら、学んだことを生活に生かそうとする子の育成
— 4年社会科「『ごみ』はどうなる？ 追跡！ なかやま探偵団」の実践を通して—

1 主題設定の理由

本学級では、意欲的に学習に参加したり、調べ活動をしたりする児童が多く、調べたことを分かりやすくまとめ、すすんで発表することができる。しかし、調べて分かったことを自分の生活と関わらせながら理解し、自分事として考えたり、まわりと協働しながら課題に取り組み、考えを深めたり、広めたりするところまでは至っていない。

6月に学習した「水はどこから」における、水をこれからも利用するために自分たちができることを考える活動では、児童の関心があまり高まらず、自分なりの考えをもつことができた子は多くなかった。これは多くの人々の工夫や努力により水が蛇口まで届くことや、水が貴重なものであることを十分に捉えさせることができず自分の生活との関わりを理解したり、自分事として考えたりすることができなかつたためだと思われる。

そこで、日常の生活で当たり前と感じていることが、実際は多くの人々の工夫や努力によって成り立っていることに気づき、社会の問題を自分の問題として捉え、まわりと協働しながら課題を解決し、学んだことを生活の場面につなげ、生かそうとする児童を育てたいと考え、本単元を設定した。

「ごみの処理」は、児童にとって極めて身近な生活課題であり、学習内容と実生活を結びつけるのに適した教材である。家庭や学校、地域社会で日々目にする「ごみを出す」ことは、児童が「当たり前」として捉えているが、その処理の過程や環境への影響が十分に理解されているとは言い難い。

本単元では、「ごみを出す」という日常的な行動から出発し、自分たちが捨てたごみが、どこに行き、どのように処理されているのか、自分たちの生活環境にどのような影響があるのかを追及し、ごみ問題のよりよい解決策を考えることで、ごみ問題を「自分事」として捉え、主体的に考える力を育めると考えた。

2 研究のねらい

「いろいろな角度から物事を見つめながら、学んだことを生活に生かそうとする子の育成」の実現に向けて、めざす子ども像を次のように設定した。

多面的・多角的な視点から社会的事象を捉え、学んだことを生活の場面につなげ、実践しようとする子

3 研究の仮説と手だて

前述のめざす子ども像の具現化に向け、以下の仮説と手だてを考えた。これらの仮説と手だての有効性を検証することを本研究のねらいとし、進めていく。

< 仮説 1 >

課題づくりや課題解決の過程において、多くの人々やさまざまなものやことに出会うとともに、仲間と関わり合い対話をすることで、社会的事象を多面的・多角的に捉え、いろいろな角度から物事を見つめ、考えることができるだろう。

【手だて 1】生活経験から問いを生み出す導入

本単元「田原市のごみ問題を考えよう」の導入部分で、児童が日常生活の中で関わっている「ごみ」に着目し、社会的事象として主体的に捉えることができるようにする。

このように身近な生活場面から課題を設定することで、課題を教師から与えられるものではなく、自ら生み出すものとして捉えさせることを意識したい。児童がごみ処理を自分事として捉え、主体的に学習に取り組む姿勢を育てることができると考えた。

【手だて 2】多様な「人」や「もの」と出会う学習活動

ごみ処理に関わる人々（収集業者や市職員）の思いや、実際に働く姿に触れること

で、これまで「ごみを出す側」の視点しかなかった児童が、「処理する側」の立場に立つて考えること（多面的な見方）ができるようにする。これにより、当たり前だと思っていた処理の裏側にある工夫や努力を自分事として捉えさせることができると考えた。

【手だて3】プロジェクトアドベンチャーの考え方を生かした全体交流

仲間との関わりを通して考えを深め、多面的・多角的な見方を育てるために、全体交流の場面ではプロジェクトアドベンチャーの考え方を取り入れた学習活動を行う。プロジェクトアドベンチャーでは、安心・挑戦・振り返りを大切に、互いの考えを認め合いながら学びを深めていくことを重視する。このように安心感のある環境の中、各グループで話し合った内容や新たに気付いたことを発表し合い、「同じ考え」「違う考え」「新しく分かったこと」に着目して聞き合う時間を設けることで、社会の仕組みを多面的・多角的に考える力を高めることができると考えた。

＜仮説2＞

児童の生活の中にある身近な疑問や、児童が着目したことを取り上げながら、調べてみたい課題を設定し、解決することができれば、自分たちの住む町の政策（しくみや工夫、人々の努力）を理解したり、生活に結び付けたりして、学んだことを生活に生かすことができるだろう。

【手だて4】市町村の取り組みや政策、課題に着目した調べ学習

市のパンフレットやデータから、ごみ処理にかかる費用や環境への影響、埋め立て地の寿命など、環境・経済・将来（多角的な視点）から地域の課題を整理させる。課題を複数の切り口で捉えることで、自分たちが今できることは何かをより深く思考できるようにする。

【手だて5】自分たちの考えを実践に移す場の設定

児童が学習で得た考えを生活の中で生かせるよう、自分たちの考えを実際に行動へ移す場を設定する。調べ学習や話し合いを通して考えた取り組みの中から、児童自身が実行可能な内容を選び、家庭や学校で実践する。これにより、学習内容を自分事として捉え、社会や生活と結び付けて考える姿に近づくであろう。

4 研究の計画

(1)抽出児童の設定

抽出児童を中心に、手だてによって変容する姿を追い、仮説の検証を行う。本研究では、児童Aを抽出児とする。

＜児童A＞（以下A児）

A児は、一つ一つのことに丁寧に取り組むことができ、好奇心も旺盛で新しいことを知ることに関心を感じられる児童である。一方で、新たな課題に対して自ら問題意識をもって取り組んだり、仲間と関わり合いながら協働的な活動を進めていったりすることは得意ではない。これまでは、与えられた課題に対して個人でじっくりと考える場面では力を発揮するものの、他者の考えを取り入れて視点を広げることは十分ではなかった。

そんなA児が友達と関わり合いながら、ごみ処理に関わる人・もの・ことに対する思いを深めることで、自分の学びを見つめ直し、自分の思いや取り組み一つで、世の中に貢献できることに気付いてほしい。

(2)単元の構想

単元の構想を表①に示す。

表①単元の構想「田原市のごみ問題を考えよう」（13時間完了）

STEP	学習活動および教師の支援・留意点（●）と評価（※）
	先生が教室のごみ箱を見せてくれたよ。紙屑や消しカスが多いな。考えてみると、家でも毎日ごみが出ているよね。
ステップ1 （出さう）	家ではごみをどのように出しているのだろう①～④
手だて1	○自分が捨てたことのあるごみにはどのようなものがあるかを発表しよう。① ・紙くず ・生ごみ ・おかし袋 ・ペットボトル ・空き缶 ・おもちゃ ・乾電池 ・いろいろな種類のごみを捨てているんだね。
手だて3	○家ではどのくらいのごみが出されているかを調査し、発表しよう。② ・家では水曜日と土曜日にお母さんがごみステーションに持っていきよ。・分別していたよ。 ・たくさん量のごみが出ていて驚いたよ。
手だて2	○OPA活動『ミッション型クイズゲーム(ごみ分別チャレンジ)』をしよう。③ ・ごみの分別の仕方が分かったよ。・分別されたごみはどこへ行くのかな。 ・分別って大変で難しいね。
	○ごみステーションを見学し、収集業者に聞き取り調査をしよう。④ ・バイオマス利用センターという所に運ばれるんだって。2

- ごみの量や種類の多さに気付けるように、生活体験をもとに考えられる発問をする。
- ごみのゆくえに視点を向けられるように、ごみの多さに気付いた児童にごみがこの先どうなるのか問い返す。
- 楽しみながらごみの分別についての正しい知識を身につけるために、OPA活動『ごみ分別チャレンジ』を行う。
- ごみの現状を追及する上で必要な情報を集めるために、質問を精選する時間を設ける。

ステップ2
(深める)

ステップ3
(広げる)

みんなの家からとてもたくさんのごみが出されているね。
ごみステーションに出されたごみは、その後どうなるのかな。

手だて2 集められたごみはどのように処理されるのか考えよう⑤～⑩

○バイオマス利活用センターを見学しよう。⑤

- ・一日に生ごみを60トンも燃やすすんだって。・大きな機械がたくさんあったね。
- ・バイオガスというエネルギーを取り出しているんだね。

○調べて分かったバイオマス利活用センターの工夫を発表しよう。⑥

- ・取り出したエネルギーを電力として活用していたね。
- ・温室効果ガスの削減にも繋がっていると言っていたね。
- ・燃やした後に出る炭もエネルギーになることを聞いて驚いたよ。

○これまでの学習を振り返り、感想交流をしよう。⑦

- ・どんなごみでもちゃんと処理されていてすごいと思ったよ。
- ・これからは気を付けてごみを捨てたいと感じたよ。
- ・ごみ処理施設がなくなったらどうなっちゃうんだろう。
- ・困っていることも結構あって大変だと思ったよ。
- ・ごみについて困っていることを専門家に聞きたいな。

○市役所の職員の方から田原市のごみ問題について話を聞こう。⑧

田原市のごみ問題、このままでいいのかな

ごみ出しのマナー
ごみ処理費
食品ロス

手だて2, 3 埋立地の寿命 不法投棄

○田原市のごみ問題の原因について調べよう。⑨

○PA活動『シンク・タンクチャレンジ』で、ごみ問題解決のための解決策を考えよう。⑩

- ・捨てる人がごみ出しのマナーを守るように発表しよう。
- ・もっとリサイクルすべき。・新しい埋立地を探したほうがいいよ。
- ・ごみ捨てにお金がかかっていたら、違反ごみが増えるんじゃないかな。
- ・一人一人がごみ捨てのマナーを守ること、ごみを減らしていくことが大切だと思う。

いろいろなごみが分別されて上手に処理されているんだね。
でもゴミ捨てのマナーを守ること、ごみを減らすことが必要。
そのためにはどうしたらいいのかな。

手だて4 ごみを減らす工夫について考えよう⑪～⑬

○ごみを減らすための地域の取り組みをしらべよう。⑪

- ・スーパーでは、リサイクルできるものを回収していたよ。
- ・新聞紙やダンボールはホームセンターに収集場所があるよ。
- ・スーパーでは、レジ袋を5円で売っているよ。

○学校でのごみ減量に向けた工夫について、調べよう⑫

- ・学校では、裏が白い紙を再利用しているんだね。
- ・ダンボールなどの資源ごみは定期的に資源化センターに持っていくんだね。

手だて3, 5 地域の大人はごみの減量を目指してがんばっているね！
わたしたちもできることを考えて実行しなきゃ！

○PA活動『発表リレー』で自分たちの考えたごみ減量作戦を伝えよう。⑬

- ・食べ物を残さないようにしよう。・ごみになるものを買わないようにしよう。
- ・リサイクル食品を買おう。・ごみを分別して出そう。・エコバッグを使おう。

いろいろな人がごみを減らすための工夫をしていることが分かったよ。
私たちも自分の「できること」を実行して、ごみの減量に協力したいな。

※ごみのゆくえに興味をもち、進んで調べようとすることができる。
(活動の様子)

●ごみ問題が他人事ではなく、自分の日常と繋がっていることを感じられるように、ごみ処理施設を見学する。

●これまでの学びを振り返ることができるよう学習の記録を教室に掲示する。

●ごみ処理の問題点を話し合うきっかけにするために、問題点に着目し、考える時間を設ける。

※市で集めたごみの処理方法や、処理に関する工夫・問題点について理解することができる。
(ワークシート)

●全員がごみ問題を考え、確かな根拠が得られるように、一人調べの場を設定する。(図書室の書籍、インターネット上の資料など)

●自分とは異なる視点や新しい気づきが得られるように、PA活動『シンクタンクチャレンジ』を行う。

※田原市の抱えるごみ問題について、根拠を明確にして自分の意見をもつことができる。
(活動の様子)

●ごみ減量に対する地域の取り組みに目を向けられるよう、生活体験を振り返る場を設ける。

●ごみ減量に向けて自分にできることを考えられるよう、地域の取り組みをまとめた資料を提示する。

●調べた内容や自分の考えを簡潔に分かりやすく伝えられるようにPA活動『発表リレー』を行う。

※これまでに学んだことを参考に、自分なりのごみ減量作戦を考えることができる。
(活動の様子)

5 研究の実践と考察

(1) 自分たちがいつも出しているごみについて詳しくなりたいな！

① 学校や家庭ごみの種類や量を調査しよう(手だて1)

本単元の導入では、児童が日常生活の中で関わっている「ごみ」を起点として課題を設定することを重視した。家庭や学校で出しているごみの写真や実物を提示し、「自分たちが出したごみは、その後どのようになっているのだろうか」と問いかけたことで、児童は普段意識することのなかったごみの行方に関心をもつようになった。

この導入を受けて行った家庭でのごみ調べでは、児童が家庭生活の中で実際に出しているごみを観察し、種類や量、分別の様子などを記録した。A児は一つのことにと丁寧に取り組むことができる特性を生かし、家庭で出るごみを日ごとに分類しながら記録していた。

これまでは、与えられた課題を黙々とこなす傾向が強かったA児であるが、家庭でのごみ調べを通して、「家ではごみが多く出ることが分かった」「もえるごみや、もえないごみに分けていた」「分け方にまようごみがあった」(次頁資料1)といった気づきが生まれ、自分なりの疑問をもつようになった。

② ごみの分別について考えよう(手だて3)

家庭でのごみ調べを通して、A児は日常生活の中に多様なごみがあり、分別に迷う場面が少なくないことに気付いた。このような導入で生まれた疑問をさらに深める場として、ごみ分別チャレンジを位置付け、プロジェクトアドベンチャーの考えを生かし、全体交流を行った。

ごみ分別チャレンジでは、家庭調べで見つけた「分けにくいごみ」を題材とし、仲間と相談したり、タブレット端末で調べたりしながら分別方法を考える活動を行った。活動にあたっては正解を求めることを目的とせず、「なぜそう考えたのか」「家庭や町の決まりとどのようにつながっているのか」を言葉にすることを大切にしました。

A児は家庭調べの段階では、自分の気付きや考えをワークシートに丁寧にまとめる姿が見られたものの、仲間との話し合いでは自分の考えを伝えることに慎重であった。しかし、全体交流において、教師が一つ一つの発言を受け止め、価値付けるプロジェクトアドベンチャーの関わりを行ったことで、A児は次第に自分の考えを言葉にするようになった。

(2) ごみの行方を調査しよう！

① ごみステーションを見学しよう(手だて2)

家庭でのごみ調べや、ごみ分別チャレンジを通して、児童はごみ処理を自分たちの生活と結び付けて考えるようになってきた。こうした学びをさらに深めるために、多様な「人」や「もの」と出会う学習活動として、ごみステーションのごみを集める収集業者にインタビューを行った(写真1)。インタビューを通して、ごみがバイオマス利活用センターや資源化センターへ運ばれる具体的な流れを把握した。

このやり取りをきっかけに、児童の中から「実際に行ってみたい」「どんなところなのか見てみたい」といった声が上がリ、学習は次の課題へと発展していった。A児の振り返りにも、「バイオマス利活用センターがどんな場所か気になりました」(資料2)と記されており、ごみ処理を点ではなく、流れとして捉え始めていることが読み取れた。このインタビューはA児にとって、ごみ処理を社会全体の仕組みとして多面的・多角的に捉える重要な契機となった。

② バイオマス利活用センターを見学しよう(手だて2)

前時の流れを受け、多様な「人」や「もの」と出会う学習活動として、バイオマス利活用センターの見学を実施した。

見学では、家庭やごみステーションから集められた生ごみが、どのように運ばれ、処理され、資源として利用されているのかを、施設の設備や資料、説明を通して学習した。また、施設で働く職員の話を直接聞くことで、ごみ処理が多くの人々の工夫と努力によって支えられていることを実感できるようにした。

A児は見学の中で、機械の仕組みや処理の流れを丁寧に観察し、メモを取りながら話を聞く姿が見られた。特に、「ごみからエネルギーが生み出されている」という説明を受けた場面では、「ただ燃やしているだけだと思った」「ごみが役に立っていることが分かった」と驚きの声を上げており、ごみ処理に対する捉え方が変化していることがうかがえた(資料3)。

また、見学後の振り返りでは、「分別をきちんとしないと、ここで働く人が困ることが

「ごみ」はどうなる？ 追跡！ なかやま探偵団

名前

注意！ 調べるときはお家の方に相談しましょう。 調べた後は自分で片付けましょう。
 3 調べられなかった日があってもいいです。 4 全部のごみを書かなくてもいいです。
 5 個人情報がわかるごみの名前は書かなくていいです。

①家からは、どのような種類のごみが出ているのか、表に○をつけて調べましょう。

ごみの種類	生ゴミ(1週間)	生ゴミ(1週間)	生ゴミ(1週間)	生ゴミ(1週間)	生ゴミ(1週間)
生ゴミ					
紙くず	○	○	○	○	○
ビニール・プラスチック	○	○	○	○	○
びん・かん・ペットボトル	○	○	○	○	○
ごし・新聞紙				○	
家電品	○	○	○	○	○
家電品・玩具		○			○
その他					○
どんなごみが書きましたか。	でんち				

②家から出るごみを調べて、気づいたことを書きましょう

家ではごみが77く出るごしが分かった。
 もえるごみや もえないごみに分けて
 いた。分けもにまようごみがあった。

資料1 A児の振り返り



写真1 インタビューをするA児(右端)

行ってみたい」「どんなところなの

今日のふりかえり

たかさんのごみが車につまれました。
 バイオマス利活用センターがどんな
 場所か気になりました。

資料2 A児の振り返り

職員 : 燃やした時に出る熱を使って電気を作っています。

C8 : え、ごみから電気ができるの？

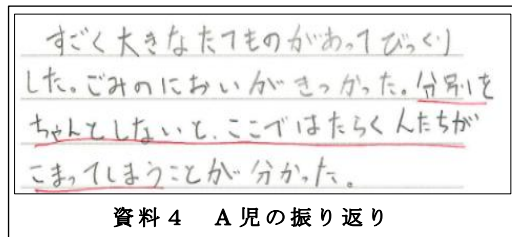
A児 : ただ、燃やしているだけじゃなくって使ってるってこと？

職員 : そうです。ごみをエネルギーとして生かしています。

A児 : じゃあ、ごみはただ処理するものじゃなくて、役に立つものになるってことだね。

資料3 会話の記録

分かった」(資料4)と記述しており、ごみ処理を施設や仕組みとして理解するだけではなく、自分たちの生活や人の働きと結び付けて考えるようになったことが読み取れた。これまで、A児は新しい知識を得ることに喜びを感じる一方で、その知識を社会全体の仕組みと関連付けて考えることには課題が見られたが、現場に足を運ぶことで、理解が具体的な実感へと変わっていった。



資料4 A児の振り返り

(3) 田原市のごみ問題について話し合おう！

① 本市のごみ問題について市役所の職員から話を聞こう(手だて2)

バイオマス利活用センターの見学を通して、児童はごみが単に処理されるだけでなく、資源として利用されていることや、その背景に多くの人々の働きがあることを実感した。見学後には、「こんなに工夫しているのに、どうしてごみは減らないのだろう」「自分たちの市では、今どんな問題があるのだろう」といった新たな疑問が児童から生まれ、学習は次の段階へと発展していった。

こうした児童の疑問を受けて、本単元では、多様な「人」と出会う学習活動として、市役所の職員を学校に招き、自分たちの住んでいる市のごみ問題について説明をしてもらう学習を設定した。市役所の職員からは、ごみの量の推移や分別が十分に行われていない現状、処理にかかる費用やごみ処理施設の限界など、地域が抱えている具体的な課題について説明があった。

このように、バイオマス利活用センターでの体験的な学習に加え、市役所の職員という立場の異なる「人」と出会う学習活動を設定したことで、A児はごみ問題を一つの施設や作業の問題として捉えるのではなく、市全体の政策や課題と関連付けて多面的・多角的に考えるようになった。

② 本市のごみ問題の解決策を考えよう(手だて2、3)

バイオマス利活用センターの見学や市役所の職員からの説明を通して、児童は本市がごみの量の増加や分別の不徹底といった課題を抱えていることを理解した。これらの学習を受けて、「知る」段階から「解決策を考える」段階へと学びを発展させるために、本単元では、本市のごみ問題を解決することを目的としたシンクタンクチャレンジ(資料5)を行った。

シンクタンクチャレンジでは、前回説明を行った市役所の職員を再度学校に招き、児童が考えた解決策について評価や助言をいただく学習活動を設定した。これは、児童の考えが実社会と繋がっていることを実感させるとともに、社会の一員として考えを発信する経験をもたせることをねらいとしたものである。

このようにプロジェクトアドベンチャーの考えを生かした全体交流の中で、市役所の職員を招いたシンクタンクチャレンジを行ったことにより、A児は仲間と協働しながら課題解決に取り組み、自分たちの考えを社会に発信しようとする姿へと変容していった。これらの手だては学んだことを生活や社会の場面に生かそうとする児童の育成において、極めて有効であったと考える。



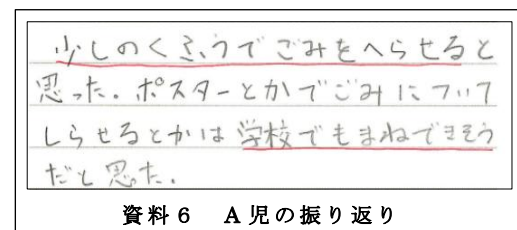
資料5 シンクタンクチャレンジの流れ

(4) 自分たちにできるごみ減量作戦を考え、実行をしよう！

① ごみを減らす取り組みについて調べよう(手だて4)

これまでの学習を通して、児童は本市がごみの削減に向けてさまざまな取り組みを行っている一方で、依然として多くの課題を抱えていることを理解した。これを受けて他市町村や学校における「ごみを減らす取り組み」に着目した調べ学習を行い、課題解決に向けた「自分たちにできる具体的な方策」について考える活動を設定した。

A児は、資料を丁寧に読み取り、「少しのくふうでごみをへらせる」「学校でもまねできそうだ」(資料6)とワークシートに記述しており、ごみ問題を自分たちの生活の場面に引き寄せて考える姿が見られた。



資料6 A児の振り返り

② ごみ減量作戦を考え、実行しよう(手だて3、5)

市町村や学校におけるごみ減量の取り組みについて調べた後、児童は、自分たちの生活の中で、実行可能な「ごみ減量作戦」をグループごとに考案した。これらの考えを学級全体で共有し、よりよい取り組みへと高めていくためにプロジェクトアドベンチャーの考えを生かした全体交流として「発表リレー」を行った(写真2)。

この全体交流を通して、A児は仲間の考えを受け止めながら、自分たちの取り組みを見直し、よりよい方法を模索する姿へ変容していった。発表リレーはA児にとって、対話を通して考えを深める経験となり、協働的に学ぶことへの意識を高める契機となった。

その後、学習を「考える」段階で終わらせることなく、実際の行動へとつなげる手だてとして「自分たちの考えを実践に移す場」を設定した。

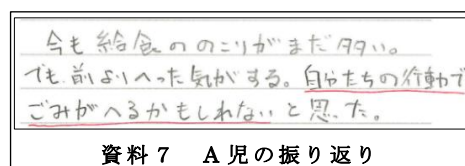
A児は「給食の残食をなくす作戦」では、残食を減らす呼びかけの言葉を考えたり、苦手な給食が出た際もできるだけ食べるようにしたりすることができ、ごみを少しでも減らそうという意識の高まりを感じることができた。また、「新聞を作って他学年や外部の人に伝える作戦」では調べ学習で学んだことを分かりやすく文章にまとめ、読む人の立場を意識した表現を工夫する姿が見られた。これらの活動を通して、A児は学んだことを自分の生活や行動に結び付け、社会に向けて発信しようとする気持ちを強めていった。

実践後の振り返りでは、「自分たちの行動でごみがへるかもしれないと思った」(資料7)と記述しており、学習内容を生活に生かそうとする意識の高まりがうかがえた。

このようにプロジェクトアドベンチャーの考えを生かした全体交流によって考えを共有・発展させ、さらに自分たちの考えを実践に移す場を設定したことで、A児はごみ問題を自分事として捉え、仲間と協働しながら解決に向けて行動する姿へと変容していった。これらの手だては、「学んだことを生活の場面につなげ、生かそうとする子」の育成において有効であったと考える。



写真2 発表リレーの様子



資料7 A児の振り返り

6 研究の成果と課題

(1) 成果【仮説1、仮説2の検証から推察】

① 仮説1の検証

A児は単元当初、新しいことを知ることには意欲的であるものの、新たな課題に対して、問題意識をもったり、仲間との話し合いを通して考えを広げたりすることに課題が見られた。しかし、家庭ごみ調べや分別チャレンジを通して、生活の中の違いや迷いに気づき、さらにインタビューや施設見学を経験する中で、ごみ処理を「分別のきまり」や「施設の仕組み」としてだけでなく、「多くの人々の働きによって支えられている社会の仕組み」として捉えるようになった。

これらのことから、A児は社会的事象を一面的に捉えるのではなく、多面的・多角的に考える力を高めていったと考えられる。

以上のことから仮説1は概ね妥当であったと言える。

② 仮説2の検証

A児は、当初、学習内容を知識として理解する段階にとどまる傾向が見られたが、市役所の職員から課題について話を聞いたことや、シンクタンクチャレンジで解決策を考え経験を通して、「自分の行動が課題解決につながる」という意識をもつようになった。

さらにごみ減量作戦の発表リレーや実践活動では、給食の残食を減らす取り組みや新聞を作って他学年や外部の人に伝える活動に主体的に関わり、学んだことを生活の場面で生かそうとする姿が見られた。振り返りにおいても、行動することの意味や達成感を言葉で表すことができおり、学習が生活や社会と結び付いていることを実感している様子がうかがえた。

これらのことから、仮説2においてもその妥当性が確認できたと考える。

(2) 課題

本単元において「自分事として捉える姿」には確かな変容が見られたが、この意識を社会科以外の場面や長期的な日常生活の中にどのように定着させていくかが、今後の課題である。今後は他教科や総合的な学習の時間とも連動し、児童が継続して社会の一員としての自覚をもてるようなカリキュラムの工夫を検討していきたい。